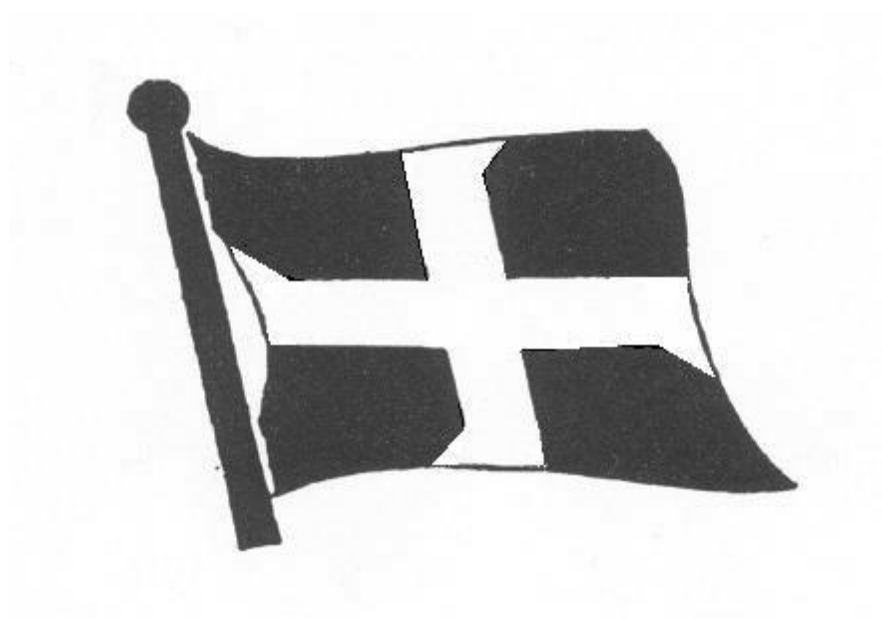


蒼穹 NEWS

No.2

関カレ総括号

令和6(2024)年6月3日発行



—目次—

- ①主将挨拶・女子主将挨拶・監督挨拶
- ②関西インカレ結果
- ③関西インカレ各競技総括
- ④その他ご報告

①主将挨拶・女子主将挨拶・監督挨拶

《主将挨拶》

先日行われました関西 IC におきまして、男子は 40 点で総合 8 位、女子は京都大・京都女子大合わせ 12 点という結果を収めました。昨年末から男子総合 8 位、女子史上最高得点(16 点)という目標を掲げてきた中で、男子は目標達成、女子は後 4 点足らずとなりました。

まず総じて、本当によくやってくれた 5 日間だと感じます。男子はランキング上位に位置する選手達が怪我を抱える中、どの競技も持てる最大限の力を発揮してくれ、またランキング圏外からの得点など様々な活躍を見せてくれました。特に両リレーでのタイム上位での決勝進出は、他組を走ったライバル校に競り勝ったこともあり、チームに大きな追い風を吹かせてくれました。女子は T&F の部初日からトラック競技で京大新が連発するなど快進撃を見せ、フィールド種目では 12 点を得点することができました。また、応援、サポートではこれまでに無いような盛り上がりを見せ、京大陸上部全員で本気で関西インカレに挑む姿があらゆる場所で見られたことは、このチームを牽引する主将として本当に誇らしく感じました。

しかしながら、完璧な目標達成とはなりませんでした。目標設定が良くなかったとは思いません。誰かが良くなかったのではありません。みんなが全力で尽くした結果が 12 点だったのですから、この事実は今後に繋げるものとして重く受け止めるべきであります。

関西インカレがどのような舞台なのか、またこのチームがどういう熱意を持って取り組んできたのかということは、5 日間を通して、未来の京大陸上部へ伝えていく身として、十分に伝えることができたと感じます。チームの皆様には、この舞台での悔しさを、憧れを、自信を、また来年の関西インカレに、これ以上のものにして繋げて行って欲しいです。

まだシーズンは始まったばかりで、これから七大戦、東大戦と対校戦が続きます。関西インカレで作った大きな流れをさらに大きくして、必ずや男女総合優勝を成し遂げて見せます。

最後になりましたが、大会開催中、遠方にも関わらず蒼穹会の方々には応援を賜り、心より感謝申し上げます。今後とも変わらぬご支援、ご声援を何卒よろしくお願いいたします。

京都大学陸上競技部主将 中川 遥仁

《女子主将挨拶》

先日行われました関西インカレにおいて、男子は総合 8 位の目標を達成、女子は史上最高得点である 16 点には及ばない結果となりました。

男子は、1 部に残ることではなく関西で戦うことを掲げてやってきました。自分たちの力を信じて立てた高い目標でした。目標を達成したこと、そして総合 8 位であることに大きな意味があります。女子は目標に届きませんでした。一方で、出場者が増えただけでなく戦えるようになってきており、男子と同じように関西で戦うチームに近づいたと思えた 4 日間でした。特に上回生の PB が目立ったことは、強くなっていけるチームであることを示せたと思っています。

チームとしての次なる目標は七大戦の男女総合優勝です。男子も女子も、チームとしても 1 人 1 人の結果としても、最大の喜びを得られるよう、全員で向かっていきます。

最後になりましたが、蒼穹会の皆様からは日頃より多大なるご声援とご支援をいただき誠にありがとうございます。今シーズンの対校戦は続きますが、引き続きご支援のほどよろしくお願いいたします。

京都大学陸上競技部女子主将 平岡 雪乃

《監督挨拶》

関西インカレが終了しました。結果は男子が 40 点で 8 位、女子は 12 点となり、男子は目標達成となりましたが、女子は目標達成には至りませんでした。

男子は主力の多くが故障しており、目標達成以前に残留争いが厳しくなるという見込みがありました。事実、最終日の最終種目直前まで神大阪大と横並びであり、あわや降格という状況でした。しかしながら終わってみれば男子は近大、大教大に競り勝ち 8 位と、素晴らしい結果でありました。女子の部でも多くの京大新、自己新が見られ、七大戦の優勝に向け大きな弾みとなりました。5 日間にわたる長い戦いではありましたが、その中で、選手でない者も含め、みな大きく成長することができた、まさに対校戦といえるような試合であったと思います。

毎年のことではありますが、今年も数人の選手が得点の大半を占めており、このままではこれから継続して一部に残留していくことはできません。京都大学陸上競技部が関西のトップで戦い続けるために、部としてより一層強くならなければなりません。まずは次の対校戦となる七大戦にて圧勝し優勝トロフィーを確実に持ち帰り、成長していく京都大学陸上競技部をお見せしたいと思います。

最後にはなりますが、現地までお越しいただきご声援いただいた皆様、また配信や速報にて応援いただいた皆様に感謝申し上げます。変わらぬご支援ご声援をよろしくお願い申し上げます。

京都大学陸上競技部監督 島村 夏惟

② 関西インカレ結果

第101回関西学生陸上競技対校選手権大会
(ロードの部)2024年4月18日・於ヤンマーフィールド長居付設長距離走路(長居公園周回コース)
(T&F の部)2024年5月22日－25日(水－土)・於たけびしスタジアム京都

1. 男子1部総合得点

順位	大学	得点
1	関西大	120
2	京都産業大	113.5
3	関西学院大	108.5
4	立命館大	102.5
5	びわすぽ大	87
6	大阪体育大	76
7	同志社大	46
8	京都大	40
9	大阪教育大	38
10	近畿大	38
11	神戸大	33.5
12	大阪大	25

2. 男子1部トラックの部得点

順位	大学	得点
1	関西大	89
2	関西学院大	77
3	立命館大	73
8	京都大	24

3. 男子1部フィールドの部得点

順位	大学	得点
1	京都産業大	50.5
2	大阪体育大	46
3	びわすぽ大	43
9	京都大	16

4. 男子1部混成の部得点

順位	大学	得点
1	同志社大	10
2	大阪教育大	8
3	大阪大	7

5. 男子1部ロードの部得点

順位	大学	得点
1	京都産業大	15
2	立命館大	6
3	大阪大	5

6. 男子 2 部総合得点

順位	大学	得点
1	摂南大	108
2	天理大	99
3	龍谷大	89

7. 男子 2 部トラックの部得点

順位	大学	得点
1	摂南大	72
2	龍谷大	70
3	大阪経済大	54

8. 男子 2 部フィールドの部得点

順位	大学	得点
1	天理大	61
2	明治国医大	56
3	摂南大	27

9. 男子 2 部ロードの部得点

順位	大学	得点
1	大阪経済大	17
2	摂南大	9
3	龍谷大	5

10. 女子総合得点

順位	大学	得点
1	立命館大	177
2	園田学園女子	154.5
3	甲南大	63
19	京都大	9
24	京都女子大	3

11. 女子トラックの部得点

順位	大学	得点
1	立命館大	147
2	園田学園女子	107
3	甲南大	60

12. 女子フィールドの部得点

順位	大学	得点
1	武庫川女子大	46.5
2	大阪体育大	46
3	園田学園女子	36
10	京都大	8
19	京都女子大	3

13. 女子混成の部得点

順位	大学	得点
1	園田学園女子	11.5
2	武庫川女子大	10.5
3	東大阪大	8
6	京都大	1

③関西インカレ各競技総括

第101回関西学生陸上競技対校選手権大会

(ロードの部)2024年4月18日・於ヤンマーフィールド長居付設長距離走路(長居公園周回コース)

(T&F の部)2024年5月22日－25日(水－土)・於たけびしスタジアム京都

～短距離(短短)～

男子 100m

予選(4 組3着+4)

1 組 高橋昂生(3) 1着 10"45(+0.2) Q

2 組 山田慎之助(4) 4着 10"62(-0.4) q

4 組 長田雅史(4) 8着 10"96(-0.3)

男子 100m 予選には高橋(3)、山田(4)、長田(4)が出場した。

高橋は得意のスタートから飛び出すと、そのまま他を寄せ付けずに組 1 着でゴール。10"45 の PB で 1 組目から会場を沸かせた。

山田はスタート直後に少し体勢を崩したがその後持ち直し、ゴールラインで 1 人をかわして 4 着でゴール。着順をとることはできなかったが、タイムでの準決勝進出を決めた。

長田は悲願の関カレ初出場となったが、緊張もあってか実力を出し切ることはできなかった。

2名が準決勝進出を決め、女子に続いて短短の仕上がりの良さを感じさせるとともに、その後の競技にも期待を抱かせる内容となった。(角谷)

準決勝(2 組 4 着)

1 組 高橋昂生(3) 3着 10"47(+0.8) Q

2 組 山田慎之助(4) 8着 10"83(+1.0)

男子 100m 準決勝には高橋(3)、山田(4)が出場した。

高橋は走幅跳の試技の合間を縫っての出場となった。普段ほどスタートで飛びぬけた感じはなかったが、

中盤以降後方の選手とはグングン距離を開けていった。10"3台を記録した1, 2着の選手に続く3着で決勝進出を決め、高い水準で安定した実力を示した。

山田はスタートで飛び出すことに成功したが、その後乗り込みがうまくいかずスピードが上がらないまま8着でゴール。目標としていた決勝進出とはならなかった。(角谷)

決勝

高橋昂生(3) 3着 10"50(-0.2)

男子 100m 決勝には高橋(3)が出場した。このレースでも得意のスタートが光り、中盤以降も周りの選手と競り合いながら見事3着を獲得。直前まで行われていた走幅跳での脚への負担も心配されたが、本数をこなしても変わらない安定したパフォーマンスと大舞台での勝負強さを遺憾なく発揮してくれた。個人としても京大としても走幅跳に続く2種目目となる得点をもぎ取った。(角谷)



100mで表彰台入りした高橋(3)

男子 200m

予選(4組3着+4)

1組 遠藤大介(1) 6着 22"92(-2.2)

2組 高田雄平(4) 3着 21"87(-1.7) Q

4組 山田慎之助(4) DNS

男子 200m予選には遠藤(1)、高田(4)が出場した。

山田は怪我と他種目との兼ね合いにより棄権した。

遠藤は大学初の試合であり、スタートは周りとは比べて遅れを取らず、これからに期待が高まるレースとなった。

高田は今シーズン初の 200mで、けがに苦しみながらも関西インカレまでに間に合わせた。持ち前の大きな走りで後半までスピードを落とさず、着順で準決勝進出を決めた。(平松)

準決勝(2組4着)

2組 高田雄平(4) 5着 21"41(-0.8)

男子 200m準決勝には高田(4)が出場した。決勝進出を目標にスタートからいい走りを見せた。100m通過あたりで軽く肉離れをしてしまったが、最後まで走り切った。けがを治し、今後のさらなる活躍に期待がかかる。(平松)

男子 4×100mR

予選(2組3着+2)

1組

高橋(3)-山田(4)-長田(4)-高田(4)

4着 40"49 q

男子 1部 4×100mR 予選では高橋(3)-山田(4)-長田(4)-高田(4)が出場した。1走の高橋(3)は多種目出場の中好調な出だして前の選手に追いつく走りを見せた。2走の山田はバトンをもらってから周り

に遅れることなく徐々に加速しスムーズなバトンパスへと繋げた。3走の長田はスピードにのりカーブでも差をつけられることなく走り切った。4走の高田は前とあったわずかな差を縮め最後まで粘り強い走りを見せた。他大学と接戦であったがゴールまで粘り見事決勝に残ることができた。(藤本)

決勝

高橋(3)-山田(4)-長田(4)-高田(4)

8着 40"73

男子 1部 4×100mR 決勝では高橋(3)-山田(4)-長田(4)-高田(4)が出場した。1走の高橋は3種目の競技であり疲れが残る中力強いスタートをきった。2走の山田はスムーズなバトンパスで周りから差をつけられることなく次に繋げた。3走の長田はバトンをもらってから落ち着いた走りで走り切った。4走の高田は周りとは差があったものの最後まで粘り強さを見せた。決勝で見事8着に入り得点するなどチームに勢いをもたらした。(藤本)



決勝進出を果たした4×100mR

女子 100m

予選(6組3着+6)

1組 中野直子(4) 6着 12"62(+1.3)

3組 三好紗椰(M1) 5着 12"49(+1.4)京大新

女子 100m 予選には中野(4)、三好(M1)が出場した。

中野はスタートでやや周りの選手に離されるも中盤以降加速が伸びていき、最後には前の選手を 1 人抜いて 6 着でゴール。長く伸び悩んでいた殻を破り、自身の高校時代の記録も 0.01 更新した。

三好は大学院での生活が忙しく、今季はあまり試合にも出られていない中ではあったが、この試合に向けて調整を行ってきた。組 5 着ながら自身の持つ京大記録 12"55 を更新し、その記録はついに 12 秒台前半に突入した。女子 100m は全体のレベルが上がっており両名とも準決勝進出とはならなかったが、女子チームの進化を示すとともに T&F の部序盤からチーム全体を勢いづけてくれる結果となった。(角谷)

女子 200m

予選(6 組 3 着+6)

2 組 中野直子(4) 7 着 26"87(-1.8)

4 組 三好紗椰(M1) 6 着 25"56(-0.4) q 京大新

女子 200m 予選には中野(4)、三好(M1)が出場した。

中野は個人としては初めての関西インカレであった。向かい風の中、課題を修正しきれず、PB や UB 更新とはならなかったが、1 日目の 100m では PB を更新しており、今後 200m も記録更新が期待できる。

三好は序盤のカーブからうまくスピードにのり、昨年の関西インカレで出した PB を更新した。同時に自身がもっていた京大記録も更新し、準決勝に進出した。(平松)

準決勝(3 組 2 着+2)

2 組 三好紗椰(M1) 8 着 26"27(-2.3)

女子 200m 準決勝には三好(M1)が出場した。予選に続き、2 本目の 200m であり、疲労が感じられた。準決勝では風に恵まれず、予選での PB 更新にはならなかったが、この大きな舞台での経験をいかして、これからのさらなる飛躍が期待される。(平松)



京大新の走りを見せる三好(M1)

女子 4×100mR

予選(3 組 2 着+2)

1 組

奥村(2)-中野(4)-平岡(4)-三好(M1)

7 着 52"58

女子 4×100mR 予選では奥村(2)-中野(4)-平岡(4)-三好(M1)が出場した。1 走の奥村は順調な出だしでスピードに乗れていたが走行中に足を痛めてしまった。2 走の中野は 2 種目めの出場であったが疲れを見せない力強い走りでもバトンを繋いだ。3 走の平岡も 2 種目めであったが前と離されることなくスムーズにバトンパスをした。4 走の三好はバトンを得てからうまく加速し前との距離を徐々に縮めた。予想外であったがまとまったチームワークで最後まで走り切ることができた。(藤本)

～短距離(短長)～

男子 400m

予選(3組2着+2)

1組 岩本翔太(4) 8着49“26

1組に岩本が出走。格上ばかりのレースで序盤から遅れをとり、最後の直線で1人かわしたものの、結果は組8着でゴール。大会前にアクシデントで体調を崩してしまい、本調子での出走は叶わなかったがPB近くのタイムで走り切った。最後の直線では諦めない姿勢を見せ、この姿勢が後のマイルリレーの決勝進出に繋がった。(益田)

男子4×400mR

予選(2組3着+2)

2組

青柳(3)-高橋(3)-岩本(4)-益田(4)

5着3'10“99 q

男子4×400mR 予選には青柳(3)、高橋(3)、岩本(4)、益田(4)が出場した。青柳はペース配分を見直した成果もあり、最後まで崩れることなく走り切り、良い位置でバトンを渡した。高橋はバックストレートで立命館とびわスポ大に並んだが、第3コーナーに差し掛かる前に抜け出し3番手となった。終盤も耐え抜き、前を走っていた関学と並びながらバトンを繋いだ。岩本はスムーズなバトンの受け取りから2番手に浮上した。バックストレートで前を走る関大を抜かそうとする積極的な姿勢を見せたが、後半はびわスポ大や関学に離され、立命館にも並ばれる苦しい展開となった。益田は上手くバトンを受け取り立命館からリードを奪った。ラスト50mまで一つ前を走る関学を懸命に追ったが、最後は関学や立命館にかわされてしまい、組5着となった。しかし、全力レ標準にあと0.19秒まで迫る好タイムであった。また、前の組で好

タイムを出した阪大に100分の7秒差で勝ち切り、タイムでの決勝進出を決めた。(川瀬)

決勝

青柳(3)-高橋(3)-岩本(4)-益田(4)

8着3'14“15

男子4×400mR 決勝には青柳(3)、高橋(3)、岩本(4)、益田(4)が出場した。青柳は最後まで崩れることなく走り切ったが、他大に大きく差をつけられる苦しい展開となった。高橋は単独走の中、懸命に前を追い、競り合いに十分加われる位置でバトンを繋いだ。岩本は京産大3走と関学の2走との接触を見逃さず、京産大に先行し7番手となった。さらに、バックストレートではスローな展開であることを見抜き、一つ前を走る同志社を抜く積極的なレースを見せた。終盤苦しくなり、同志社には先行されるが、京産大とのリードは守り抜き、7番手でバトンを渡した。益田はバックストレートで京産大に抜かれ順位を落としてしまった。第3コーナーでさらにリードを広げられてしまい、必死に前を追跡したが、順位を上げることはできず8着となった。事前ランキングを覆し、京大に1点をもたらした。4人とも連戦による疲労の中、最大限の走りをしたが、関西の大学との差を感じる悔しい結果となった。(川瀬)



得点をもぎ取った最終走者・益田(4)

女子4×400mR

予選(3組2着+2)

3組

中野(4)-平岡(4)-三好(M1)-服部(2)

5着4'04"07

女子 4×400mR には中野(4)、平岡(4)、三好(M1)、服部(2)が出場した。中野はラップタイムが59秒台と自身のUBを上回る好走であったが、他大に序盤から徐々に離されてしまい、最終的には大きく差を広げられた。平岡は個人の100mHや400mHの悔しさをぶつける走りをしたが、連戦による疲労もあり、他大にさらに差を広げられる苦しい展開となった。三好は一つ前を走る東大阪大との差を詰め、京大記録保持者の意地を見せたが、単独走の状態からは脱することができなかった。服部は自身初の関西インカレ出場による緊張や単独走を強いられる状況の中、懸命な走りを見せたが、大きく広がった差を詰めることができず組5着となった。終始、単独走を強いられ、他大との実力の差を突きつけられる厳しい結果となった。(川瀬)

～ハードル～

男子110mH

予選(3組2着+2)

1組 五十嵐聖(4) 7着15"06(+3.3)

春先から自己ベストを更新し好調であった五十嵐(4)が出場した。アプローチがうまくはまり、上位選手に食らいつく素晴らしい走りを見せた。追い風参考ではあるが自己ベストを超える記録であった。(島村)

男子400mH

予選(4組1着+4)

1組 青柳佑(3) 3着52"30 q

2組 高橋昂生(3) 1着52"07 Q

4組 柳町悠斗(1) 7着56"98

予選1組には青柳(3)が出場した。今シーズン始まってからPBを連発しており、確かな手応えをもって臨んだ本大会であった。レースは組の速い流れに乗ってスムーズに前半を進める。8台目において逆足のハードリングが浮いたが、そこから持ち前の粘り強さで一人をかわして52"30でゴールし、タイムにより決勝進出を果たした。ランキングを大きく返しての決勝進出となり、京大に大きな流れを引き寄せる会心のレースとなった。

予選2組には高橋(3)が出場した。身体的にも精神的にも非常に苦しい中、得点獲得のために出走を決めてくれた。レースは序盤から安定したレースを展開し、300mの時点で先頭に立つ。その後もミスなくハードルをクリアし、最後は流しながら着順での決勝進出を決めた。身体がベストな状態でないながらもレースをまとめる貫禄の走りであった。

予選4組には柳町(1)が出場した。大学初レースとなったが、非常に落ち着いてレースに臨むことができた。前半から軽やかな走りでスムーズにレースを進める。300m付近から徐々に厳しい走りとなり、最後の直線は強い向かい風の影響もあって先頭から大きく離されてのゴールとなった。しかし、全体通して身体能力の高さを活かした素晴らしい走りを見せ、今後練習を積んでいけば好記録を出すことを予感させるレースであった。(新庄)

決勝

高橋昂生(3) 5着52"20

青柳佑(3) 8着53"68

男子400mH決勝には青柳(3)と高橋(3)が出場した。青柳はバックストレートの強い向かい風の影響もあり、思うようにスピードに乗れないままレースが進んだ。7台目で歩数を切り替えてからはピッチアップして粘り強く走ったものの、8着でゴールした。高橋は前半から積極的にレースを進めるが、前半の力

みもあってか7台目付近から苦しい走りになる。しかし、最後のハードルを越えてから意地の走りで一人かわして6着でゴールした。二人とも決勝では悔しいレースになったものの、関西トップレベルの地力を証明する走りを見せてくれた。(新庄)



ランキングを返し得点を勝ち取った青柳(3)

女子100mH

予選(4組3着+4)

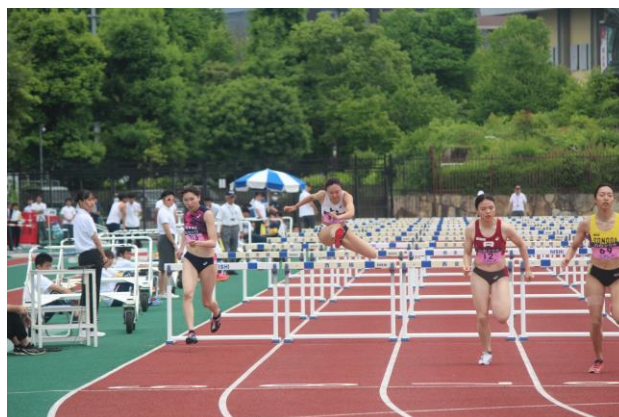
1組 平岡雪乃(4) 3着14“42(+1.9) Q

女子100mH予選は女子主将である平岡(4)が出場した。追い風に乗って前半から刻み込み、2着で危なげなく準決勝に駒を進めた。記録は 14.42 と、自身の持つ京大記録を 0.38 更新する快走であった。(島村)

準決勝(2組4着)

2組 平岡雪乃(4) 8着15“28(-1.3)

女子100mH準決勝は女子主将である平岡(4)が出場した。予選で京大記録を更新した平岡は、スタートからトップの選手に差をつけられる苦しい展開の中でも終盤まで粘りを見せた。女子主将としての意地とプライドを見せたレースだった。(島村)



力走を見せる女子主将・平岡(4)

女子400mH

予選(4組1着+4)

3組 平岡雪乃(4) DNF

予選3組には平岡(4)が出場した。普段は 110mH を専門としているが、今回は 400mH やマイルに向けて長い距離の練習にも取り組んできた。レースは前半からスピードを生かして積極的に進め、非常にいいペースで 200m を通過する。しかし、疲労が出てくる6台目においてハードルに足をかけて転倒してしまい、途中棄権となった。悔しい結果とはなったが、前半部分では関西トップレベルでも十分戦えるところを見せ、今後好記録を出すことを予感させるレースであった。(新庄)

～中距離～

男子800m

予選(3組2着+2)

1組 杉原一湧(3) 5着 1'55“76

2組 阿部陽葵(2) 10着 1'58“03

3組 西川洸平(4) 7着 1'55“57

男子800m予選には杉原(3)、阿部(2)、西川(4)が出場した。

杉原は後方に位置取ってレースをスタートしたもの、位置取りが難しくなかなか前方に出られないまま

バックストレートで後方にさがった。ラスト 200m は
圧巻の猛迫を見せたものの2着の背中はずいぶん遠く、5着で
ゴールした。

阿部はスタートから順調にレースを進めるものの、
メインストレートで押し出され400m通過時点で最後
尾となる。そこからは集団に離され粘りの走りを見せ
るも10着でのゴールとなった。

西川は序盤から積極的にレースを展開し、3番手あ
たりで先頭を虎視眈々と狙った。そのまま600m通
過あたりまで先頭の背中を追い続けたが、後方の選
手に追い上げられて7着でゴールした。

全組が似たような展開となる中で3人ともが全力を
出し切ったレースだった。結果は悔しいものだったが
中距離パートだけでなく陸上部全体を大いに盛り上
げてくれた。(川崎)

男子 1500m

予選(4組4着+4)

1組 小井稜真(4) 12着4'04"88

2組 奥村究(3) 15着4'09"83

男子 1500m 予選 1 組には、小井(4)が出場した。
速いスピードを想定した練習をつみ、4 分切りが期待
された。最初は集団後方に位置どりをし、様子を伺う。
位置どりが変わらず、800mは2分10秒あたりで通過。
その後徐々に集団が分かれるが、一周65秒ペース
を刻み続け、先頭集団から20mほどの位置でラスト
一周を迎える。ラスト一周でスパートをかけることが
できず後退するが、最後の直線で切り替えて前方の
選手をかわし、12 着でゴール。

男子 1500m 予選 2 組には、奥村(3)が出場した。
良い練習が積めており勢いのある奥村は序盤から果
敢に攻める走りを見せた。立命館の大森を先頭にハ
イペースで進み、集団の中間あたりに位置をとる。2
周目もハイペースを保ち、先頭集団とは差があいた
ものの第二集団の先頭として800mは2分5秒前後
の通過。しかし 2 周目で最後尾あたりまで後退し、苦

しい走りとなる。ラスト一周で切り替えを図るもスバ
ートをかけられず、15 着でゴールした。成長著しい選
手であり、来年のリベンジに期待したい。(中村)

女子 800m

予選(4組1着+4)

4 組 小倉唯愛(3) 7着 2'22"35

女子 800m 予選には小倉(3)が出場した。

小倉はスタートから集団とは離れた後方で自分の
ペースを刻んだ。中盤もペースを落とすことなくラス
トまでしっかり走りぬき7着でゴールした。怪我に悩ま
されたままシーズンインを迎えたが、大一番までに間
に合わせる不屈さを見せた。SB をマークしたがシー
ズンはまだまだこれからであり、さらなる記録更新が
期待される。(川崎)

女子 1500m

予選(3組4着+3)

1組 濱口姫生(2) 10着4'43"12

1組 大浦はるな(4) 15着4'51"92

2組 高木こころ(1) 17 着5'04"36

女子 1500m 予選 1 組には、大浦(4)、濱口(2)が
出場した。濱口は集団前方で快調に走り、大浦は集
団後方で落ち着いて様子を伺った。2人とも先頭集
団から遅れることなく一周目は濱口は集団中ごろ、
大浦は集団後方につける。800mをそれぞれ2'28、
2'30あたりで通過するが、集団がばらけ始め、濱口
が先頭から離れる。大浦は第3集団となる。しかしそ
こから 2 人は粘りの走りを見せ、濱口は先頭から溢
れてくる選手を拾いつつ UB に迫るタイムでゴール。
大浦もラストでスパートをかけ前方選手をかわしてゴ
ール。

女子 1500m 予選 2 組には、高木(1)が出場した。
先頭集団から2、3メートル離れた位置どりをし、冷静

にレースを進める。ゴール付近で第二集団後方につけ、集団はばらけて800mを2'37あたりで通過する。ラスト一周付近でやや後退するも安定した走り続け、5分4秒でゴール。一年生ながら粘りの走りをし、今後に期待がかかる。(中村)

～長距離～

男子10000m

決勝

稲田正裕(3) 16着33'45"02

男子10000mには稲田(3)が出場した。スタート直後から京産大の選手を中心にハイペースでレースがすすんだ。稲田は第2集団の最後尾にくらいつきレースを進めたが、2000mごろから次第にラップタイムが落ち集団から離れ単独でレースを進めた。序盤のハイペースの影響は重く後半にラップタイムを上げることは叶わなかった。ただし、ほぼ全ての選手が後半ラップタイムを落としておりコンディションの厳しいレースであった。(佐向)

男子3000mSC

決勝

小野竜之介(1) 14着9'59"30

男子3000mSCには小野(1)が出場した。序盤は集団の前方でレースを進めたものの、他の選手に囲まれる中で自分の思うような走りができず、後半は集団から遅れてしまった。なんとか9分台には収めたが、練習状況による想定からは大きく離れる結果となった。今回のレースの悪いイメージを払拭しつつ、この先の大学陸上で長く活躍できるよう、少しずつ練習を積み上げて基礎を固めていきたい。(斎藤)

ハーフマラソン

決勝

江端康汰(M1) 18着1'10'38

尾原翔(M1) 19着1'11'29

三嶋友貴(4) 15着1'09'38

ハーフマラソンには江端(M1)、尾原(M1)、三嶋(4)が出場した。三嶋は序盤から入賞が見える位置で積極的にレースを進めたが、入賞した同志社勢のハイペースに振り落とされ大きく失速して15位に終わった。江端、尾原は堅実なペースでレースを進めるも、大舞台のプレッシャーからか実力を出し切ることはできず、それぞれ18位、19位と厳しい結果となった。得点を取ることはできず、一部残留に向けて厳しい船出となった1日目であった。(三嶋)



粘りの走りを見せた三嶋(4)

～競歩～

男子10000mW

決勝

原圭佑(M1) 2着42'50"97

中村颯葉(2) 6着43'43"75

土田浩生(2) 8着44'54"53

男子10000mWには原(M1)、土田(2)、中村(2)が出場した。

原はスタート直後から、立命館大学の土屋に果敢

に食らいつき、中間点付近で離されはしたものの、格上相手に積極的なレースをみせた。

中村は、中盤まで5位集団で様子を伺いながら、前からこぼれてきた選手を着実に捉えるなど、クレバーなレース展開であった。

土田は得点を見据えて8位集団で粘りの歩きをし、ラストもしっかり切り替えることで入賞を手繰り寄せた。

結果として、原は中盤以降単独の2位を守り抜き、中村、土田はともに自己記録を更新しての6位、8位に入賞。全員が見せ場をつくり、京大に11点という大量得点をもたらした。(梅原)



粘りの歩きで得点をもぎ取った土田(2)・中村(2)

～跳躍～

男子走高跳

決勝

山中駿(4) 1位2m13

田中颯真(3) 8位1m95

男子走高跳には山中(4)と田中(3)が出場した。

田中は1m90を1本目、1m95を2本目にクリア。続く2m00は惜しくもクリアできなかったが、見事、事前ランキングを覆し8位となった。

山中は2m00を余裕をもってクリアすると、2m13までパス。それも1本目でクリアし、優勝を確定させ競技終了した。怪我で本調子ではないなか、見事3

連覇を達成した。(鴛原)



3連覇を成し遂げた山中(4)

男子棒高跳

決勝

吉富文暁(3) NM

男子棒高跳には、吉富(3)が出場した。気温が高い途中でピットの向きが変わる、体力的にタフな試合展開となった。吉富は4m00から競技を開始したが、3本の中でポールをうまく合わせる事が出来ず、NMとなった。今回感じた悔しさを今後の成長の糧としてほしい。(深井)

男子走幅跳

決勝

齋藤啓(M1) 15位6m85

高橋昂生(3) 2位7m58

男子走幅跳には齋藤(M1)、高橋(3)が出場した。

高橋はランキングトップで挑む二連覇がかかる試合であった。高橋は1本目で踏切板の40cm程前から踏み切り7m33を記録。実測では7m70超か。その後100mの準決勝との兼ね合いもあり、自分のペースで試技を進めるのは難しかったと思うが2回目に跳んだ7m58で準優勝。勝ちきれず記録を出せな

かった悔しさが残ると思うが、足首の怪我のことなどを考えるとよくやってくれたと思う。

齋藤はここへ向けてスピードのキレを上げてきたものの、助走が上手く噛み合わず 1 回目の6m85が最高記録となり15位。得点できない悔しさが残る中であったが、翌日の三段跳に向け希望が持てるような助走をしてくれた。(中川通)

男子三段跳

決勝

梶慎介(M1) 11位14m98

齋藤啓(M1) 16位14m84

松井和輝(3) 24位13m60

男子三段跳決勝には梶(M1)齋藤(M1)松井(3)が出場した。

梶は 1 本目、2 本目と 14m90 台を跳び、安定感を見せるも、ベスト 8 のラインである 15m03 には届かず、11 位に終わる。3月からの怪我の影響を感じさせる試合となった。

齋藤は1本目から思い切りの良い跳躍を見せ、2本目には自己ベストに近い14m84を跳ぶも、ベスト8ラインには届かず、16位となった。

松井は一本目にファールではあるが良い跳躍を見せた。しかし初めての関西インカレということもあり、精神的な弱さが出てしまい、2本目、3本目は思い切った跳躍が出来ず、13m60で24位となった。(杉本)

～投擲～

女子砲丸投

決勝

篠田佳奈(4) 9 位 11m83 京大新

女子砲丸投げには篠田(4)が出場した。一、二投目は右に力が抜けて、上手く砲丸に力が加えられず、思うように記録を出せなかった。迎えた三投目はこれ

までとは異なり低い軌道で真っ直ぐ砲丸が飛び出た。記録は11m83。これは自己新記録であり、また京大新記録にも相当する。決勝投擲に進めるかと思われたが、後の試技者が記録を伸ばし惜しくも9位に留まった。(木下)

女子円盤投

決勝

中芝美玖(4) 6位38m32

女子円盤投には中芝(4)が出場した。2投目までは思うように投げられず苦しんだ。声を出したことで緊張がほぐれて3投目で37m57を投げ7位に浮上した。思わず涙が溢れた。その後4投目で38m32をマークして6位で競技を終えた。見事に事前ランキングを返した。最後の関西インカレで目標としていた40mに届かず悔しい結果となったがやれることはやり切れた。(篠田)

女子やり投

篠田佳奈(4) 1位57m63 京大新

亀井真希(2) 18位33m74

女子やり投には篠田(4)と亀井(2)が出場した。

亀井は大会直前に体調を崩したり肘を痛めたりするなどコンディションが悪い中での出場であった。練習投の時点で緊張と肘の痛みからか思うような投げができていなかったが、コーチングの甲斐もあって動きを良くしていった。記録は2投目の33m74で18位に終わった。来年は自分の投げを発揮しての活躍が期待される。

篠田は大会3連覇を目指しての出場だった。コンディションが良好ではないなか、1投目に53m27を投げて2位につけた。本来のリズムを保てない投げが続くも3投目に54m75を投げて1位を奪取。徐々に動きを改善し、4投目には自己ベストを更新する57

m63をマーク。そのまま逃げ切り本大会3連覇の偉業を成し遂げた。今シーズンの60mスローに期待が持てる試合結果であった。(岡本)。



京大新で3連覇を達成した篠田(4)

～混成～

女子七種競技

新保歩(4) 8位4277点

女子七種競技には、新保(4)が出場した。

100mHでは組1着でゴールし、20日前の奈良県選手権で出した自己ベストを更に更新した。去年から約1秒伸びており、まだまだいけるとのことで今後にも期待がかかる。

走高跳においては1m30からスタートし、自己ベストタイの1m50となった。自己ベストをコンスタントに

跳べる安定感を見せた。

砲丸投では3投目で9m09の記録を残した。彼女を知る人にとっては多少物足りなさを感じられたものの、大きく崩れることなく試技を終えた。

200mでは大きく自己ベストを伸ばし、翌日に弾みをつけた。1日目の合計は2543点で自己ベストを更新した。

走幅跳では、5月の奈良県選手権で出した、自己ベスト4m90に迫る記録でまとめた。

やり投げにおいては風が強くコンディションがあまり良くなかったものの、修正力を見せ、投げる毎に記録を伸ばした。

最終種目の800mでは組1着でゴールし、西カレ標準を切る好タイムで自己ベストを更新した。(周藤)



自己ベストを見せ得点を獲得した新保(4)

④ その他ご報告

本年の関西インカレをご観戦いただいた OB,OG の方々の名簿を以下に掲載させていただきます。この度は暑く、遠方の会場にもかかわらずご観戦いただき誠にありがとうございます。

並びに、ご足労いただいたにもかかわらずお名前が掲載されていない方につきましては、この場を借りてお詫び申し上げます。

鯉谷忠夫 S41
藤原忠義 S41
森本正幸 S41
吉田基 S42
勝村弘也 S44
中村茂夫 S48
池本忠司 S49
家村芳次 S51
桂総一郎 S51
宮下欣二 S51
眞野勝文 S53
重村充男 S54
三好稔彦 S54
熊谷元 S59
櫻井研吾 H22
岩橋優 H25
備藤翼 H29
五十嵐隆皓 H30
天野くるみ R1
清水裕美子 R1
土屋維智彦 R1
浅井良 R3
芦田開 R3
梶原隆真 R3
澤田剛 R3

中野水貴 R3
平野亘 R3
黒川泰暉 R4
小坂みゆ海 R4
酒井良佑 R4
柴田栗佑 R4
鈴木洋太郎 R4
高木穂乃香 R4
鄭晟皓 R4
仲村快太 R4
西川真悠 R4
平岡拓 R4
藤田雄大 R4
今西直 R5
川口修大 R5
小西菜月 R5
山田大智 R5
岩崎光起 R6
川添緑夏 R6
田中恵実 R6
藤浦敦士 R6
森尾美月 R6
(敬称略)



蒼穹ニュース 令和6年度 第2号
令和6年6月3日発行

発行所：京都大学体育会陸上競技部
編集者：佐向丘（蒼穹ニュース担当副務）
写真担当：濱口姫生・大西智貴

陸上競技部 HP	http://www.athletics.kusu.kyoto-u.ac.jp/
陸上競技部記録 HP	http://www.athletics.kusu.kyoto-u.ac.jp/kiroku.htm
関西学連 HP	http://gold.jaic.org/jaic/icaak/index.htm
メールアドレス	sakoh.kyu.56n@st.kyoto-u.ac.jp（佐向）